

第VI章 プログラム推進の基盤となる児童へのかかわり

「あのとき、先生は、ぼくの話とうなずきながらずっと聞いてくれた。」

「あのとき、先生のかけてくれた一言が、私の心の支えになっている。」

児童を思う教職員の言動や接し方が、児童を勇気付け、やる気を高めます。逆に、気付いてもらえなかったり受け止めてもらえなかったと感じた児童は、落胆や苛立ちを覚えることでしょう。

生徒指導を効果的に進めるためには、児童と教職員の信頼関係を築くように努めることが大切ですが、そうした信頼関係は、児童に対する教職員の日ごろの接し方や言動によって作られるものです。

問題行動等防止プログラムの推進においても、その基盤となるのは、教職員の言動であり接し方です。

日ごろから心がけておきたい教員のかかわり方については様々なものがありますが、今回の調査研究や学校訪問等から特に重要かつ効果的であると考えられるものを、以下の3つとして例示し、『さぬきの教員 かかわりの3訓』として掲げることとしました。

さぬきの教員 かかわりの3訓

- 一 共感的に受け止め
- 二 チームの力で
- 三 毅然と粘り強く

1 かかわりの3訓?①『共感的に受け止める』

まず大切なことは、児童を理解することです。

生徒指導提要にも、「人は理解してくれている人には安心して心を開きますが、理解してくれていない人に対しては拒否的になり、心を閉ざしたまま対応します。生徒指導においては愛と信頼に基づく教育的関係が成立していなければその成果を上げることはできません。」と述べられています。

さらに、児童は、一人一人が個性的な存在です。例えば、体育があるのに体操服を持ってきていないということも、なぜそうなっているのかは児童によって様々です。

児童の持つそれぞれの特徴や傾向をよく理解することによって、いつ、どのような方法によって指導するのが最も効果的であるかということが明らかになってきます。

先生は「自分のことをわかってくれる人」ですか

共 感

★思いを共有してくれる

「大変だったね」
「先生も悔しかったよ」

★時間を共有してくれる

「今日の昼休み、楽しかったね」
「放課後、いっしょに相談しよう」

★言い分を受けとめてくれる

「それは確かに腹が立つかも」
「そういうことが気になっていたんだね」

★自分をしかり、伸ばしてくれる

「あなたなら、〇〇もできるはず」
「〇〇した方が友達もうれしいよ」
「まず〇〇をやってみたら？応援するよ」

理 解

2 かかわりの3訓②『チームの力で』

教職員の中で、児童の特性や児童を取り巻く環境を一番分かっている人と言えば学級担任でしょう。特に、小学校では、児童はほとんどの時間を学級担任と過ごします。それだけに、学級担任は、「私の学級の児童は、私が教え育てなければならない」という強い責任感を持って日々の教育活動を行っています。ある児童の様子がおかしいと感じたときや、ある児童が授業中に時々立ち歩くようになったときは、自分がしっかり指導しなければという気持ちが湧き上がります。

しかし、学級担任が自分の力で何とかしようと抱え込んでしまったことで、対応が遅れ、事態を悪化させてしまったケースは少なくありません。したがって、児童のことで気がかりなことはすぐに生徒指導担当教員や管理職に報告しておくことや周囲の教職員に少し相談してみることが必要なのです。

そうすれば、自分では気付かなかった指導方法を提案してもらえるかもしれません。その児童に対して複数の教職員がそれぞれの専門性を生かして多様なかかわりを持つこともできます。いろいろな人が、その児童のよいところを認め励ますことで児童を支えていくことができるのです。

また、問題行動を起こした児童に対応する場面では、厳しく指導するかかわりと、寄り添い励ますかかわりの両面が必要になる場合があります。そうした場合にも、例えば生徒指導担当教員と学級担任が連携するなど複数の教職員で対応する方法が考えられるのです。

学校は全校児童を全教職員で守り育てている。そんな構えが大切になってきています。

3 かかわりの3訓③『毅然と粘り強く』

社会で許されないことは学校でも許されません。

たとえ何かに強い怒りを感じるがあったとしても、人を殴ったり物を壊したりすることは許されません。

「ダメなことはダメ」と厳しく指導しなければなりません。

こうしたことを、発達の段階に応じてきちんと理解することが重要であり、そのためには教職員の毅然とした指導が大切です。

ただし、ここで言う毅然とした指導は、決して「聞く耳を持たない指導」ではないのです。児童の気持ちに共感しつつも、誤った言動には大人の立場からきちんと指導・支援することです。

そして、毅然とした指導には、あわせて粘り強い指導が必要です。

決して見捨てたりしないという熱意を持って、粘り強く指導し続けることによって、いつか児童は信頼を寄せ、前向きな気持ちを持ってくれるはずです。

教職員のかかわり次第で、それを受け止める児童の心が和らぐこともあれば、荒立つこともあります。また、児童は、教職員が友達にかかわる様子を見ています。教職員のかかわり方は、友達へのかかわり方の手本でもあるのです。

共感的に受け止め、チームの力で、毅然と粘り強く

どの児童も、今日は学校でどんなかかわりが生まれるかと、楽しみに登校してきます。さぬきの教職員として、3訓をいつも心に留めて、児童にかかわりたいものです。